黒人フェミニストのF.ハーパーの選択

高階　　悟

序

19世紀に活躍したアメリカの詩人・小説家であり、奴隷制廃止運動の活動家であった黒人フェミニストのフランシス・ハーパー（Frances E. W. Harper, 1825-1911）に関する二つの選択の意義とその背景について考察してみたい。

フランシス・ハーパーは、1825年にメリーランド州ボルティモアで自由黒人の両親の間に生まれた。彼女の両親は早く亡くなり、ハーパーは中流階級の叔父叔母に育てられ、叔父ウィリアム・ワトキンズの経営する自由黒人のための学校で13歳まで教育を受けた。叔父ワトキンズは、奴隷解放運動の機関誌『解放者』を購読し、その機関誌に頻繁に投稿をする著述家であり、牧師でもあった。牧師で奴隷制廃止論者の叔父は、ハーパーのその後の人生に大きな影響を与えたと思われる。ハーパーは21歳の頃より文才を発揮し、キリスト教的倫理観に基づいた詩や奴隷制に関係した詩を書き続けた。ハーパーは29歳の時に奴隷制廃止論者ウィリアム・ギャリソンの序文をつけて最初の詩集『さまざまな題材の詩』（*Poems on Miscellaneous Subjects*, 1854）を発表した。さまざまな物語風の詩の中で、奴隷制の非人間性を女性の視点から描いた詩「奴隷の母」や「奴隷競売」が北部の奴隷制反対の人々に深い感銘を与えた。「奴隷競売」では、若い娘が黒人であるために母親の目の前で奴隷として売られてゆく様子が描かれている。

母親たちは涙を流しながら立ちつくす
最愛なる子供たちが目の前で売られてゆく
子供たちの悲痛な叫びは顧みられず
専制君主たちが金貨で子供たちを買い取っていった。[1]

この詩集『さまざまな題材の詩』は、多くの女性に訴え、南北戦争前に20版を重ねた。この頃より、ハーパーは奴隷制反対協会の演説家として活躍し始め、詩や短編小説などの著作活動も続けた。

南北戦争後、ハーパーは解放された黒人の社会的地位向上と女性の権利のために南部を講演して回った。19世紀の女性解放運動（フェミニズム）は、自由と平等を求める奴隷制廃止運動に女性が参加したことから生まれ[2]、セネカ・フォールズ女性会議での女性宣言、"We hold these truths to be self-evident: that all men *and women* are created equal...."[3] に到達するのである。黒人女性のハーパーは、女性の地位改善のために女性参政権獲得運動に参加している時、「ジェンダーか人種か」の政治的選択に直面する。この選択は、黒人であり、しかも女性であるという二重に差別されたフランシス・ハーパーのアイデンティティの問題でもある。また、著述家のハーパーは、最初の長編小説の中で混血の主人公の「黒人か白人か」の人生の選択を扱っている。

Ⅰ.「ジェンダーか人種か」の選択

第一の選択の問題は、ハーパーが女性の権利獲得活動の中で直面した「ジェンダーか人種か」の選択である。1848年、女性運動は奴隷制廃止運動に参加していた白人女性エリザベス・スタントンやルクレシア・モットなどが中心となりセネカ・フォールズ女性会議において女性の財産権、発言権、演説の自由、離婚の自由、職業選択の自由、教育の機会均等、そして参政権を要求した時から始まった。当時の女性運動は白人女性中心であったが、黒人の指導者フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass, 1818-1895）や黒人女性の活動家ソルジャーナー・トルース（Sojourner Truth, 1797-1883）も最初から参加し、その後女性参政権獲得運動と共闘していった。フランシス・ハーパーは、ダグラスやトルースから少し遅れて女性の地位向上のために女性参政権運動に参加した。

しかし、南北戦争が終わり、1869年に憲法修正第15条が提案され、黒人への選挙権が現実の問題となった時、女性の参政権運動の中で黒人男性の参政権を切り離して女性の参政権のみを主張する立場と黒人男性の参政権を容認する立場に分かれた。女性の参政権のみを目標とするニューヨーク派のエリザベス・スタントとスーザン・アンソニーは、「全国女性参政権協会」（National Woman Suffrage Association）[4]を設立した。かつて奴隷制廃止論者で女性の参政権運動のリーダーになったスーザン・アンソニーは、女性の権利を優先する立場から次のように主張している。

> もし、知性、公正、そして道徳を政府が重視するならば、女性の問題が最初に持ち出されるべきであり、黒人の問題は最後である。[5]

黒人の参政権と女性の参政権が政治論争の的になった時、黒人女性活動家たちは「人種とジェンダー」の板挟みになった。ここで黒人フェミニストのソルジャーナー・トルースとフランシス・ハーパーは、異なった選択をした。奴隷としてニューヨークに生まれ30歳にして自由の身となり、女性参政権運動に参加したソルジャーナー・トルースは「全国女性参政権協会」に踏み止まった。なぜ黒人女性のトルースは、「ジェンダー」の道を選んだのだろうか。奴隷から自由の身となったトルースを受け入れた社会は、黒人共同体ではなく白人中心の奴隷制廃止協会でありフェミニスト集団であった[6]。文盲なトルースの優れた才能を開花させたのは、ニューヨークの奴隷制廃止論者や白人フェミニストたちであり、そのような交友関係が彼女の選択に大きな影響を与えたと思われる。トルースは、1850年に自らの体験を語った『ソルジャーナー・トルースの体験記』を出版しているが、それは白人のオリバー・ギルバートの代筆による「奴隷体験記」である。

黒人参政権と女性参政権の政治論争について、黒人指導者フレデリック・ダグラスは、黒人の選挙権を保証する憲法修正第15条は「黒人の生命が関係している緊急な問題」と主張し、女性参政権運動と距離を持つようになる。黒人男性の参政権を容認するボストン派のルーシー・ストーンとヘンリー・ブラックウエルは、「アメリカ女性参政権協会」（American Woman Suffrage Association）を設立した。黒人女性のフランシス・ハーパーは、かつての奴隷制廃止論者が多数を占める「アメリカ女性参政権協会」に加わり、参政権をめぐる政治論争に対して次のように主張している。

「人種が問題となった時、われわれ（黒人）は、性の問題はたいした問題とならない。しかし、白人女性は性の問題を強く支持し、人種をあまり問題にしない」[7]

フェミニストとしてのハーパーは穏健的な立場を選び、黒人男性の参政権を容認する「人種」の側を選んだ。黒人女性ハーパーは、南北戦争後女性の政治的権利の要求よりも黒人が人間として生き残ることが緊急な課題と判断したとも言える。1869年には、奴隷解放に対する南部白人の反動として白人優越主義者の集団KKK団などが南部で形成され、黒人に対する暴力的な攻撃やリンチが始まった時期でもある。奴隷制廃止論者でフェミニストのハーパーは、奴隷解放後も人種差別と根深い偏見に苦しむ南部の黒人共同体の現実を見聞した後に政治的選択をしたのである。一般的に政治的選択とは、時には打算的で便宜的な選択を意味する時もあるが、ハーパーの選択は、彼女のキリスト教倫理と再建時代の黒人の状況を把握した後の妥当な選択である。

そして、翌年の1870年、黒人の投票権を保証する憲法修正第15条が議会を通過した。1890年には、分離していた女性参政権運動も統合されて「全国アメリカ女性参政権協会」が設立された。しかしながら、「全国アメリカ女性参政権協会」の基本姿勢は、黒人および移民を排除しようとする人種差別的考え方に基づいたものであった。[8]

ハーパーの「ジェンダーか人種か」の選択が意味するものは、黒人の人種差別と女性の性差別を比べて、社会的により差別が深刻な方が優先して改善されるべきであり、参政権を保証されるべきであることと、19世紀の白人女性中心の女性参政権運動は、黒人女性の参政権獲得を保証するものではないとう人種差別的性質を持っていたという事実である。さらに、ハーパーが南部再建時代に南部を講演旅行をして回った後、彼女の大きな心境の変化を友人に告白している。ハーパーは南部からの北部の友人へ最後の手紙で「私は黒人に属する」[9]と述べており、黒人共同体との一体化を図ろうとする姿勢が表されている。約250年間に渡りアメリカ社会の奴隷制によって黒人が剥奪された人間性や公民権を回復するためには、「第一に人種問題の解決であり、次に女性問題である」とも言える。このようなハーパーの自覚が、初めての長編小説『アイオラ・リロイ、または、取り払われた黒い影』（*Iola Leroy; or, Shadows Uplifted,* 1892）の執筆をも可能にした。

Ⅱ. 混血児アイオラ・リロイの選択

第二の選択は、ハーパーが67歳の時に書いた小説『アイオラ・リロイ、または、取り払われた黒い影』の主要な混血児の登場人物の「黒人か白人か」の人生の選択である。

ハーパーの小説『アイオラ・リロイ』は「新しい形式に達しようとしてメロドラマ、新聞記事風な記述、冒険小説、奴隷体験記、奴隷廃止小説、リアリステックな小説、口承伝統、ロマンスのような伝統的形式の複合体」[10]であるとも言われている。「女性の時代」と言われた19世紀後半に、黒人女性によるロマンスを含む長編小説『アイオラ・リロイ』は、白人の読者の関心を引き、奴隷廃止運動の活動家による奴隷体験記的小説は、多くの黒人読者にも訴えてベストセラーになった。

小説『アイオラ・リロイ』の物語は、奴隷制時代から南部再建時代にいたる約50年間に渡る出来事を含んでいるが、再建時代の物語が全体の三分の二を占めている。再建時代は、黒人が奴隷制が廃止されたためにアメリカ社会の中で自分の人生を選択し、責任を持って生活が出来るようになった時期である。白人にとっての再建時代は、南北戦争によって破壊された建物や踏み荒ら

された農園の再建であるが、解放された黒人にとってのこの時代は奴隷制によってバラバラにされた肉親の探索と再会の期間でもあり、黒人への帰属意識（アイデンティティ）を再認識した時期でもあった。

小説『アイオラ・リロイ』の主人公アイオラ・リロイは、裕福な南部農園主の父親と混血奴隷の母親の間に生まれた青い眼と白い肌を持った混血児である。白人の父親は、娘のアイオラと息子のハリーに教育を受けさせるために北部の学校にやり、アイオラとハリーは北部で白人として学生生活を楽しんでいた。しかしながら、父親が黄熱病で亡くなり、二人は社会的・経済的な支柱を失い、当時の "one drop rule"（つまり、一滴でも黒人の血が混じっていれば黒人である）の慣習によって奴隷の身分に落とされる。ハリーは自分の素性をアイオラから手紙で知らされ、白人か黒人かの二者択一を迫られる。ハリーはその選択を「人種問題についてどこに立つかどうかの選択以上の問題」[11]として捉え、黒人として残された肉親の安否を優先的に考えて、南部に連れ戻される前に黒人部隊に入隊する。つまり、ハリーが黒人の人生を選択したのは、父親からの支援を失って白人として生きられなくなり、母親の所属する黒人の共同体を選んだのである。

一方、アイオラは南北戦争中に白人農園主に辱められる寸前に北軍の兵士（黒人）に助けられ、北軍の野戦病院で看護婦として献身的に働き、白人の医師に求婚される。白人医師との結婚は、再び白人の世界に仲間入りできる（パッシングの）チャンスであったが、アイオラは「わたしたちの間には通り抜けることのできない障壁がある」[12]と言って断る。アイオラは白人同様に肌の色が白いが、黒人として生きる道を選び、北部で店員として仕事につく。その職場で黒人客と話をしたことから白人店員の同僚に黒人の素性が明らかになり、解雇されるが、アイオラは「私の血管中の最高の血液は、アフリカ人の血である。私はそれを恥じることはない」[13]と述べる。北部でも南部同様の人種差別を体験するが、アイオラは女性の経済的な自立を目指して仕事を探し、看護人の仕事を見つける。そこでアイオラは、南部黒人のために医師として奉仕することを決意している黒人医師に出会い、自分も日曜学校の先生になり「黒人のために持続的な奉仕」をしようと決意する。

小説『アイオラ・リロイ』の混血児アイオラが黒人として生きる道を選んだ理由の一つは、弟のハリーと同じく個人的な安逸な生活よりも黒人として生活している母親との再会を優先したためである。さらに、アイオラは「黒人の共同体」のために一生を捧げようと決意した時、次のように黒人医師に述べている。

> 私は人生で自分の運命を選択してこなかった、そして私ができるもっとも単純なことは、状況を受け入れて自分にできるベストのことをすることである。
> 私はもっとも自分を必要としている黒人のために奉仕しなければならない。[14]

「状況を受け入れて自分にできるベストのことをする」という生き方は、一見して受動的にみえるが、そこには積極的に運命または現状に挑戦してゆく人間の意志がある。19世紀の黒人が受け入れる状況とは何か。それは、前にも述べた人種差別的な "one-drop rule" である。"one-drop rule" とは、白い液体の中に一滴の黒い液体が入ると、その液体は「黒」と区別されるという全く不合理な論理である。その理論は、奴隷制を維持するために定めた白人のための論理である。"one-drop rule" の目的は二つあり、一つは白人農園主が黒人女性に子供を生ませることで労働力として混血の黒人奴隷を増やすことであり、もう一つは生まれた混血児を白人の家系

から排除するための勝手なルールである。アイオラは、白人の父親が亡くなったために南北戦争後には白人として生きられないこと自覚して、"one-drop rule" を逆手にとったのである。南部の「状況を受け入れて自分にできるベストのことをする」道を選んだのである。アイオラは、"one-drop rule" で差別されるまえに自分が「黒人である」と宣言し、状況を肯定的に受け入れることで、人種差別的状況を超越したのである。そして、肌の色の白い黒人が白人社会にパッシングすることなく、黒人とアイデンティファイすることは黒人の大同団結への道を開くことでもある。[15]

アイオラは、女性としての個人的な幸福よりも、黒人共同体の社会的・経済的・知的向上のために身を捧げることにしたのである。アイオラは、「黒人か白人か」の選択に直面し、白人農園主の手から救い出してくれた黒人兵、看護を必要とする黒人、教育を必要とする黒人のために奉仕する道を選んだのである。この選択は、政治的というよりはキリスト教のモラルに基づいた良心的選択である。ここでのキリスト教とは、南部農園主の信じる偽善的なキリスト教ではなく、アイオラの母親が、「受難の十字架と新約聖書から学んだキリスト教」[16]であり、作者フランシス・ハーパーが叔父ウィリアム・ワトキンズから学んだキリスト教でもある。小説の中でアイオラは、アメリカの再生のためには「イエス・キリストの福音の主張を完全に理解して、それらを国民生活で実行すること」[17]の必要性を主張している。黒人医師はキリスト教の黄金律「何事でも人々からして欲しいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」("Whatsoever ye would that men should do to you, do ye even so to them.") の実行がすべての黒人問題解決になるだろうとキリスト教の重要性を説いている。また、作者のハーパーも「アメリカの再生に唯一可能性のある方法としてキリスト教」[18]をあげている。作者ハーパーと混血児アイオラ・リロイは、ともにキリスト教の黄金律（マタイ伝、7:12）「何事でも人々からして欲しいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」に従った良心的な選択をしたのである。

Ⅲ．弟ハリーの選択とカラーコンプレックス

しかしながら、小説『アイオラ・リロイ』のすべての混血の登場人物が良心的選択をしているのではない。登場人物の「黒人か白人か」の人生の選択には多少のニュアンスの相違がある。その大きな原因は、黒い黒人と混血の黒人との間のカラーコンプレックスのためである。カラーコンプレックスとは、黒人がお互いに差別するようになる皮膚の色や容貌についての心理学的なコンプレックス（執着）である[19]。カラーコンプレックスは、白人優越主義に基づく黒人に対する偏見と人種差別の歴史のなかで黒人社会に作り出されたものである。肌の白い黒人と肌の黒い黒人は、お互いにコンプレックスを持っており、時には対抗意識を抱く。なぜなら、農園主は混血児をうまく利用して奴隷制を維持させたからである。一部の白人農園主は、女性奴隷との間に生まれた子供には屋敷内の仕事を任せたり、時には特別に教育を受けさせたのである。一部の混血児は、白人としてパッシングできる利点を利用して南北戦争後に社会進出を達成した、一方、黒い黒人たちは十分な教育も受けられず、仕事にもつけずに黒人居住区に取り残されたのである。

小説『アイオラ・リロイ』の主要な登場人物は、肌の色の白い黒人であるが、弟ハリーの恋人ルシールは肌の色の黒い黒人である。ハリーは、黒人として南部で黒人共同体のリーダーとなり、教師として働く黒人女性ルシールと知り合いになる。ルシールは、混血のアイオラやハリーとは異なり人種を選ぶ余地がない肌の黒い黒人であり、彼女からするとアイオラやハリーは「有利な立場にある黒人」である。ルシールの側からすると、ハリーが黒人として生きる道を選んだのは、

白人社会で素性を隠して生きることができなくなったためとも解釈できるのである。肌の黒いルシールは、ハリーにプロポーズされた時、肌の白い母親のマリーとアイオラのカラーコンプレックスを気遣い次のように述べている。

「あなたのお母さんは娘として私を好きになれないのじゃない。ハリー、外見に対する偏見は、白人に限られたことではないから」[20]

ハリーはその心配をうち消し、「アイオラは、白人になることができなくない人であり、黒人になろうとしないことはない人である」と含みのある返答をする。ハリーがアイオラを「白人になることができなくない人」として語る時、そこに彼のカラーコンプレックスがある。が、ハリーは肌の色の黒いルシールを安心させて、二人は結婚に漕ぎ着ける。

一方、ハリーがアイオラに「もっともすばらしい女性」(the most remarkable woman) としてルシールを紹介する場面にも、彼の色の黒い黒人に対するカラーコンプレックスが見られる。

アイオラが「彼女について教えて下さい。若くて、魅力的で才気ある女性ですか」と聞き、ハリーは、「魅力的で、素晴らしい、賢い女性である」と答える。

アイオラは次に「ハリー、私もその女性に興味を持ったわ。彼女の外見について説明してくれる」と聞き、ハリーは「まず第一に、彼女は21歳くらいである」と答える。

アイオラはさらに「女性の年齢はタブーな話題じゃない。私はもっと彼女について知りたいの」と問い詰める。ハリーは「彼女は肌が黒く、表現豊かな眼をしており、髪や外見からしてまったく他の血は混ざっていない」[21]と答える。アイオラは「それは良かった」と言ってルシールについての話が終わる。

この二人の会話で、ハリーは一番重要なこと、最初に話すべきことを一番最後に告げている。当時の社会の習慣として、見知らぬ人について語るときに一般的なアメリカ人が思いつく最初の質問は「その人の肌の色は」[22]であった。ハリーは、ルシールを紹介する時、彼女の身体的特徴を説明することをためらった様子が読みとれる。ハリーは、肌の黒い黒人に対する複雑な感情、カラーコンプレックスを引きずりながら黒人として生きる道を選んだように思われる。それは黒人の良心的選択というよりは、再建時代の南部の価値観を引きずった上での選択であり、南部の状況を受動的に受け入れた上での選択である。

Ⅳ. 個人の選択と時代的制約

フランシス・ハーパーが女性参政権運動に参加していた時に「人種」を選択したこと、小説『アイオラ・リロイ』の主人公が「黒人」を選択したことは、「状況を受け入れて自分にできるベストのことをした」実例である。人々がさまざまな機会に直面する選択の問題は、個人の判断として片づけることもできるが、黒人フェミニストのハーパーとトルースの選択を比べて気づくことは、その時代の社会的慣習、交友関係や地域性が個人の意志決定に大きな影響を与えていることである。小説の混血の主人公アイオラ・リロイと弟ハリーの人生の選択の場合は、黒人とは誰なのかという当時の白人の定義に制約されていたことが分かる。個人はそれぞれの時代的制約の中でより良いものを選んでいるが、それが適切なものであったかどうかはその後の歴史が判断することである。

フランシス・ハーパーは、1869年の黒人参政権と女性参政権の場合には「人種」を選んだが、

その後フェミニストとしての活躍も著しい。ハーパーは、1893年のシカゴ万国博覧会の世界女性代表者会議で「女性の政治的展望」と題して多くの白人の聴衆を前にして次のように述べている。

男性が破壊し、うち砕き、そして打破したうんざりするような不毛の年月を経て、今日、私たちは女性の時代の入り口に立っている、そして、女性の働きは非常に建設的である。[23]

フランシス・ハーパーのこの発言は、彼女の二つの選択と同じように時代的制約を超越しており、今日のフェミニズム運動の先駆けにもなっている。

[注]

※この論文は、第33回アメリカ学会で発表した「19世紀のアメリカ黒人女性F.ハーパーの選択」に加筆したものである。

1) Maryemma Graham ed., *Complete Poems of Frances E. W. Harper*, Oxford Univ. Press, 1988, p.10.

2) 渡辺和子編、『アメリカ研究とジェンダー』、世界思想社、1997、p.8.

3) Susan Auerbach ed., *Encyclopedia of Multiculturalism*, Marshall Cavendish, 1994, p. 1572.

4) Ibid., p.1574.

5) Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist*, Oxford Univ. Press, 1987, p.67-68.

6) Carla L. Pererson, "Doers of the Word": African-American Women Speakers and Writers in the North (1830-1880), Rutgers Univ. Press, 1995, p.24.

7) Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist*, p.68

8) 渡辺和子編、『アメリカ研究とジェンダー』、世界思想社、1997、p.15.

9) Farah Jasmine Griffin, "Frances E.W. Harper in the Reconstruction South," *SAGE: A Scholar Journal on Black Women*, (1988), p47.

10) Elizabeth Ammons, *Conflicting Stories: American Women Writers at the Turn into the Twentieth Century*, (Oxford Univ. Press, 1992), p.27.

11) Frances E. W. Harper, *Iola Leroy; or, Shadows Uplifted*, (Oxford Univ. Press, 1990), p.126.

12) Ibid., p.109.

13) Ibid., p.208.

14) Ibid., p.235.

15) Kathy Russell, Midge Wilkson, Ronald Hall, *The Color Complex: The Politics of Skin Color Among African Americans*, (Ancker Books, 1993), p.74.

16) Frances E. W. Harper, *Iola Leroy; or, Shadows Uplifted*, p.107.

17) Ibid., p.216.

18) John Ernest, *Resistance and Reformation in the Nineteenth-Century African-American Literature*, (Univ. Press of Mississippi, 1995), p.195

19) Kathy Russell, Midge Wilkson, Ronald Hall, *The Color Complex: The Politics of Skin Color Among African Americans*, p.2.

20) Frances E. W. Harper, *Iola Leroy; or, Shadows Uplifted*, p.278.

21) Ibid., p.199.

22) John Ernest, *Resistance and Reformation in the Nineteenth-Century African-American Literature*, p.13.

23) Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist*, p.94.